



1. 研究開始当初の背景

- ① 本研究の協力者である芸術経済学者ハンス・アビング博士 Dr.Hans Abbing による『芸術という例外的経済 Why are Artists Poor?』Amsterdam University Press 2002(邦訳：山本和弘訳、グラムブックス、2008年)が開示した「芸術神話」は、17世紀の資本主義草創期における芸術のダイナミズムが19世紀の有閑階級の子弟である「ボヘミアン・アーティストたち」の登場によって、非経済的かつ非商業的なものに変質したことを明らかにした。その一方で量的には圧倒的多数を占める一般社会人(=非アーティスト)もまたこの神話を信じて、自らの創造性を眠らせたまま現代社会を生活している事実を私たちは共有している。この現代社会に埋没した「創造性という社会資本 Social Capital as Creativity」を活性化させる端緒となるのが、近年のアール・ブリュット研究である。しかし、その実践者は身内に障害のある家族をもち個人的利害から始まることが多いのは世界的傾向であり、アール・ブリュット研究は旧来の近代美術と同じ枠内に留まってしまっている。21世紀の現在に求められているのは、アール・ブリュットの特殊的研究ではなく、「私たちすべてが生来的にもっている創造性の開花」へと敷衍される一般的研究である。
- ② 本研究に先行する「厚生芸術の萌芽的研究」(2008-2010年度、課題番号20652016)はこの「社会資源としての創造性 Creativity as Social Resource」をボヘミアン・アーティストが浪費する現状を批判し、経済的価値としての創造性という剰余価値の膨大さを示した。この剰余価値は「厚生芸術の基礎研究」(2012-2014年度、課題番号24520199)における「アーティストのサバイバル調査2014」のより詳細な分析によってリロケーションの方向が期待されていた。現実社会における特殊アーティスト像(狭義のアーティスト)と一般アーティスト像(後述の「ソーシャル・アーティスト」)との乖離は、芸術神話に由来するが、この神話を脱呪術化する手掛かりがこのサバイバル調査によって示された。「萌芽研究」の成果は、社会から遊離した芸術が、政治経済的課題である「医療福祉・環境・教育」との「乗法」によって、「社会的芸術」と「ソーシャル・アーティスト Social Artist」の活躍する時代の到来を待望していたが、この分析は先行研究における芸術的価値のバブル化批判と共振するものであり、特定層のための芸術から真の民主的芸術への芸術パラダイムの大転換への方途を希求するものでもある。
- ③ 本研究では芸術社会学者パスカル・ギーレン Pascal Gielen の『芸術的多様性のざわめき The Murmuring of the Artistic Multitude』を参照しながら「芸術」と乗法されるべき政治経済的課題として新たに「農業」を加える。さらにニコラ・ブリオー Nicolas Bourriaud が『リレイショナル・エステティック relational Aesthetics』で提唱する社会的関連性の理論は、芸術が内部で悪循環する旧弊を反省し、その外部すなわち社会という農地 frontier へと連続していることを裏付けている。
- ④ 創造性がア・プリオリに私たちすべてに内包される資源であることはドイツの彫刻家ヨーゼフ・ボイス Joseph Beuys(1921-86)のテーゼであるが、ボイスにおいて「農地」は「凍てつくシベリアの大地」へと隠喩化され、難解を極めている。その最も重要な作品シリーズは「最も人気のある現代美術作品」(C.Tisdall)でありながら、いまだその「意義が解明されていない多くの謎」を含んでいる。厚生芸術ではその存在証明を「全ての人々に与えられた障害」としての「創造性の硬化化」を温熱状態に保つアール・ブリュットに範を求めながらもそれを打ち破る研究が求められていた。富裕層や美術館制度批判に代表される「特定需要層」のための制度変容の議論と同時に昨今アール・ブリュットの研究と実践的活動が世界的に活発になっている状況は、「創造性=ア・プリオリの資源」という厚生芸術の課題を傍証するものである。一方、これまで厚生芸術研究は、医療と芸術との関係を、従来のコレクターとしての医師ではなく、医師でもあるアーティストに求めた研究を行ったが、医師芸術家は歴史上わずかな例(イサムノグチ、ニコラ・デ・マリア、ヴォルフガング・ライプ、マシュー・バーニー、清水誠一、中ザワヒデキ)を数えるにすぎなかった。これは個人の営為である近代芸術と個人の病を治癒する近代医学と同じ枠内に留まるものと仮定すれば、ボイスの難解なアクションが治療芸術 Heil=Kunst という社会的要請からは未達の研究課題として残存することが明らかになり、その原因の究明と解決法の策定が喫緊の課題として要請されていた。

2. 研究の目的

いまだに「神話状態」の中にあるアーティストの厚生を科学的に分析することによって、以下の3つの課題を解明し、芸術とアーティストが社会において有用性をもってアクティブに貢献し、国富 National Wealth を産出する「ソーシャル・アーティスト」の育成と養成を実践的に追求することを基本的な目的とする。そのために【「創造性」>「旧来芸術」】の不等式を証明することを理念的目的とした。

- ① 「芸術神話」を「科学的に脱呪術化」することによって、「芸術の有用性」が閉塞状況にあることを明らかにして、社会を創造的に活性化しうる「ソーシャル・アーティスト」の概念策定と社会への実践的普及を行う。

- ② 従来の芸術概念は私たちすべてに生来内包していると仮定される創造性の一部であることにすぎないことを証明し、社会資源としての創造性の価値を実社会において生かす具体的基盤を確立する。
- ③ アーティストの厚生研究を「私たちはみなアーティスト」という J.ボイスのテーゼに代入することによって、非芸術分野とされる従来の職業すべてを「創造的産業」へと変容させるインフラストラクチャーを構築する。

そのために本研究は「厚生芸術の萌芽的研究」と「厚生芸術の基礎研究」の成果をふまえた二つの課題、すなわち「継続課題」と新たに見出された「新規課題」の解明へと研究目的を細分する。

#### 【継続課題の解明】

21世紀の少子高齢化社会において、狭義の芸術概念が創造性という無限の資源であることを解明して、国富を経済的かつ創造的に豊かにしうる指標 GAP を策定する。このことによって従来の産業を創造的に重層化させ、自称アーティストの閉鎖的創造性を社会化するとともに、非アーティストをソーシャル・アーティスト予備群として開花させる。そのために「アーティストのサバイバル調査 2014」で見出された問題を芸術神話が発出する問題系と交差させて、脱呪術化(=社会化)を目指す。

#### 【新規課題の解明】

- 1) 「農業(創造的耕地としての社会) × 「芸術」 = ソーシャル・アーティストの育成プログラム  
「厚生芸術の萌芽研究」で提起した政治経済分野と旧来芸術が交差するセクターとして[芸術(医療福祉+環境+教育)]という因数分解を示した。今日、地震や噴火、洪水などを含めた極端気象が顕著になった環境と私たちの生存圏が交差してきたことを踏まえて芸術概念を超長期的視点から相対化する。すなわち経済的にバブル化した芸術は、芸術学的にもバブル化していることを明らかにし、芸術の本来の価値を再確認する。研究代表者はすでに農業と芸術の関連を宮沢賢治研究『ヨーゼフ・ボイスと宮沢賢治』東北芸術工科大学紀要 no.13]において示していたが、その発展である実践的研究では国民総生産 GDP に倣った定量的指標 GAP(GrossArtistProduct)を定性的指標 GAP(GreatArtistsProgram)へと変換し、計量化不可能な芸術的価値を狭義のアーティストと広義のアーティスト(一般社会人)とが共有しうる新たな芸術概念を策定して、「ソーシャル・アーティスト」という新たな芸術家像を社会に提言する。
- 2) この点に関して、「萌芽研究」報告書で指摘した芸術における熱学 Thermodynamics と J.ボイスが近代的な政治経済芸術概念の破砕を試みた作品としての《コヨーテ三題》をとらえ直し、日本のみならず世界の人々の創造性を温かく溶解させ、「創造性という凍てついた農地」としての社会を温め耕す。その予備研究として近代の射程をより相対化するためにランドアートの代表的アーティストであるロバート・スミッソン RobertSmithson (1933-72)とクラウス・ダオフェン Klaus Dauven (1966-)などの関係を、天文学と地理学を意味する天地学 Cosmography を援用して解明する。
- 3) 神話化された芸術が本来の芸術の在り方ではなく、芸術が例外的経済としてその価値を増大することによって芸術そのものの価値がバブル化した現状を批判的に研究し、芸術神話を脱神話化することにより、芸術が王侯貴族の系譜にある現代の富裕層の「私有財」ではなく、真に民主的な「共有財」となるべきことを明らかにすることにより、今もなお神話を共有させられている美術愛好家を含む世界市民に真の芸術の価値を解明的に伝達して、正しい意味での芸術の民主化された姿を伝えることをも目的とした。

### 3. 研究の方法

主に三つの方法論を用いた：a.芸術学的方法とミュージオロジー批判 b.計量経済学および社会学的方法 c.哲学的方法(現象学)。上記の目的を達成する知るために、これらを学際的に用いた。

研究目的で示した【「創造性」>「旧来芸術」】の証明作業を、「社会治療芸術」という新たな概念を「アール・ブリュット」の偏りと対比させ、より社会性の高い芸術概念が今日必要とされていることを芸術学と社会学を応用しながら行った。アール・ブリュット現象とその研究は残念ながら近代芸術の枠内のわずかな拡張と福祉の結合に限定されており、社会全体へと創造性を拡張するものでないことは、J.ボイスのいう社会治療芸術 Heil-Kunst の社会学的分析によって明らかとなった。近代以降、医師の美術コレクターが多いにも関わらず、なぜ「アーティスト・ドクター artist doctor」が極端に少ないのかは従来の芸術学的方法では解明しえなかった。本研究では、ボイスの連作アクション《コヨーテ》の詳細な現象学的分析と医療社会学的方法の援用によって、アール・ブリュット研究の現状批判を超えて、ボイスのアクションが「硬化化した近代社会そのものを治療する社会的医療アクション」であることを検証した。そのことによってアール・ブリュットの「ブリュット」が、「硬化化していない生の創造性」と解すべきことを新たに確認することができた。医療社会学の視点は従来、人類学的視点によって限定されていたボイスのアクションが社会を覚醒させる挑発的治

療行為であることを記録映像と各種文献双方の現象学的解析によって人類学的視野から解放することを成功させた。また近代的展示制度の硬化化された顕著な事例としてのギャラリーや美術館という制度空間批判をもミュゼオロジーの限定的な視野を非人類としての動物（コヨーテ）へと拡張することによってミュゼオロジーの限界を外から解体することも可能となった。

この点において、創造性は狭義のアーティスト（美術家、音楽家など）の占有領域ではなく、広義のアーティストすなわち「ソーシャル・アーティスト」と名付けるべき人材がすでに社会で活躍している事実を社会的学的サーベイ（サンプル収集）から析出し、それらを社会が要請していることを証明しえた。この方法は、アール・ブリュットが介助を必要とするために非自律的であるというネガティブな側面を明らかにするのではなく、制度内美術もまた自律性神話に過度に依存していた事実をもあぶり出した。ここでは数学の因数分解を応用し、一般概念であるアーティストの社会的役割を明確化し、それぞれが社会において「世界批評」と「芸術」×「医療福祉・環境・農業・教育」との二乗体、すなわち「ソーシャル・アーティスト」という新たな芸術家を社会に提起するその予備研究として、従来のようなアーティストが社会にもたらす「世界を批評する有用性（芸術的価値）」のみならず、富（市場価値）の生産者として社会がアーティストを受容する基本的土壌を確認する極めて重要な概念であることを哲学文献の精読によって解明した。

厚生芸術研究はアートワールドのインサイダーとアウトサイダーの双方に軸足をもつという構造的な研究利点をもっており、従来のアートワールドのアウトサイダーである芸術社会学や芸術経済学には到達不可能な目標を確実に射程に納めることができた。哲学的視点は、従来に芸術概念が私たちすべてに生来内包していると仮定される「創造性」の一部に過ぎないことを証明可能とし、私たちすべてが社会において創造性を存分に発揮することによって、社会そのものを創造的に活性化しうる基盤を確立する立脚点をもたらした。このことは経済学的には消費者と分類されざるをえない「自称アーティスト」に実業すなわち「医療福祉・環境・農業・教育」とを掛け合わせた具体的現場と具体的職種のマッチングを見出す作業と接続できた。このことによって自称アーティストの職業意識向上をもたらすとともに、社会のいたるところで「ソーシャル・アーティスト」が働きうる創造的環境を醸成した。これらを各種メディアで告知することによって、一般の職業人も「ソーシャル・アーティスト」というステータスを目指して、既存の職業をクリエイティブに高める相乗効果をもたらす社会拡張性を獲得した。ここでの方法は経済学の統計的手法による GAP (Gross Artist Product) の分析を、定性的方法である芸術現象学方法によって GAP (Great Artists Program) へと変換して分析・総合することにより、芸術の経済的価値のみならず芸術が世界全体を豊かにするより高次の価値概念として社会へと還流される芸術現象を社会化する方法を用いた。

#### 4. 研究成果

本研究が前提とする「芸術という例外的経済」という事態は、芸術セクターの非一般性（＝例外性）を 19 世紀半ばの「ボヘミアン・アーティスト」の台頭時から 20 世紀末までの約 1 世紀半の例外的現象と位置づけられることに成功した。だが芸術の「神話性」は研究上においては脱神話化されたが、本研究以外の芸術研究者および一般の芸術消費者にもまだ共有され続けたままである。本研究は芸術神話の脱神話化を以下のとおり推進した。

20 世紀の後半において、種々のバブル崩壊にもかかわらず、市場を拡大してきた芸術は、一見民主化されたように見える。美術館訪問者、国際芸術展の来訪者の増大は、たしかに芸術の民主化に見える。しかしこの現象は芸術の消費者（＝非所有者）を増やしたのみで、社会学的にはごく一部の芸術を所有する富裕層の卓越化を強化したにすぎない。だが一般の芸術研究や美術館、芸術産業は富裕層の卓越化という事実を覆い隠したまま、芸術の普及を喧伝している状況が継続してしている。

本研究は H.ア빙グの社会・経済学的研究と足並みをそろえてきた。Abbing の最新研究は「芸術が特別なものではなくなりつつある」動向を社会学的に詳細に明らかにしている。その研究は本研究が定量的分析によって国内総生産 GDP と連動する GAP (Gross Artist Product) の策定自体が自明であることを明証的に示した。

よって本研究の最終成果は、予備研究である経済指標 GAP の制定を飛び越えて、近代以降の経済システムそのものを徹底批判し、制度化された芸術の解体と新たに到来すべき芸術を生み出す方向性を見いだした。その先に「私たちはみな芸術家である」という革命的モットーとともに 20 世紀を駆け抜けたドイツの社会彫刻家ヨーゼフ・ボイスの難解で知られる「コヨーテ」にまつわる三つの作品の厚生芸術的解明が適切に位置づけられた。「厚生芸術」の概念は元々ヨーゼフ・ボイスの芸術概念から帰納された概念であるからである。

2008 年のリーマンショックによる経済不況にも関わらず、芸術市場はかつてない活況の中にあつた。「例外的経済」という芸術の特殊な側面は、19 世紀半ばのブルジョア階級の台頭とともに現れた「芸術神話」が 21 世紀もなお信奉され続けていることを示している。と同時に実体経済における芸術セクターは、エコノミストの研究が示す通りクラシック・カーやヴィンテージ・ワインと同様の値動きを示し、芸術研究のアウトサイダーであるエコノミストからは、その「例外性」が仮象的かつ一時的なものであることがすでに指摘されている。これは本研究

協力者の H.アビングの最新研究である“Are the Arts Becoming less Exclusive?” Palgrave, London, New York 2019 が明確に証すとおり、「芸術の神話性」が時間をかけて徐々に「脱神話化」されて「例外的」ではなくなり、一般の経済セクターに再接近していることを示す研究成果と一致する。よって本研究が策定する予定の GDP(Gross Domestic Product) にならった新たな経済指標（定量的指標）である GAP(Gross Artist Product) という予備研究もまた自明のものとなり、GAP は新たな芸術指標 Great Artists Program として定性的指標の研究に集中することが可能となったのである。

以下に本研究成果論文の目次を記す。

第一部 21世紀における芸術の有用性について

第一章 芸術（家）の「有用性」について

1. 手織の有用性
2. 有用性の排撃
3. 科学と芸術における有用性をめぐる闘争
4. 消費者からみた芸術の有用性

第二章 芸術による世界の承認をめぐる闘争について

1. 本来的芸術から離れた芸術業
2. 道具の有用性と芸術の有用性との闘争
3. 生きることの不具合
4. 技術批判という有用性
5. 総かり立て体制を批評する

第二部 ネオ・コスモグラフィアとしての芸術概念の相対化

1. コスモグラフィア
2. 天変地異の時代
3. 視覚のアノマリ
4. 天文学者と地理学者
5. 望遠鏡と気球、そして写真
6. 回転と革命、あるいは螺旋
7. ネオ・コスモグラフィア

第三部 「アーティストのサバイバル実態調査 2014」結果から「ソーシャル・アーティスト」の要請

1. アーティストのサバイバル実態調査 2014 集計結果再考
2. 「自称アーティスト」を「ソーシャル・アーティスト」に変換する方法

第四部 ヨーゼフ・ボイスにおける《コヨーテ三題》の厚生芸術的解釈

緒言 《コヨーテ三題》とは何か

第一章 《コヨーテⅠ》原題：「私はアメリカが好き、アメリカは私が好き」  
1974年、ルネ・ブロック・ギャラリー、ニューヨーク

第二章 《コヨーテⅡ》原題：「ベルリン発：コヨーテからのニュース」ロナ  
ルド・フェルドマン・ギャラリー、1979年

第三章 《コヨーテⅢ》原題：「2台のピアノによるコンサート・パフォーマンス」  
1984年、草月ホール、東京

結語 「コヨーテ」が要請する「ソーシャル・アーティスト」

第四部は本研究の総括である。狭義のアーティスト概念が余剰する自称アーティストの供給過剰によって、近代に創出された「神話」であることが、「サバイバル調査 2020」集計の再検討から裏付けられた。これはアール・ブリュット研究が示唆した創造性の一般性とその未開拓の創造性の埋没（硬冷化）と密接に関連している。創造性は近代的芸術観によって極めて狭い卓越的領域に限定されているからだ。J.ボイスの《コヨーテ三題》は、アメリカ、ドイツ、日本という全く別の地域を凍えた大地として連結させることによって、私たち人間が失った本性（野生性=前言語）の回復作業すなわち社会の治癒行為として遂行されたものである。コヨーテによって野生として表象され、「ö ö」として発話された叫び声は、言語獲得以前の幼児の発話であり、それは人類が言語を獲得する以前の創造性が充満した姿を回復させようとする極めて挑発的な営為であった。特に近代以降、言語依存によって失われた人間本性は、美術や音楽でさえ制度化され、創造性の硬冷化を促進する側に与したものとしてボイスは、意味の成就する以前の哀しみ、怒り、恐れ、畏怖に近似した発話「ö ö」（インファンティア *infantia*）を様々な展開することによって、創造性の喪失によって迎えようとしている近代という危機の様相を描き出すアクションを行ったのである。それは個人の身心の治療行為ではなく、社会そのものを治癒する行為であった。その解明によって、厚生芸術研究は、創造性を再起動させる社会という耕地をあらためて獲得したのである。ボイスの社会治療芸術は、余剰する自称アーティストと創造性を忘却した一般社会人の双方をソーシャル・アーティストとして現代に召喚するものなのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス研究《カプリ・バッテリー》	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 袴田京太郎展カタログ	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ウェザーリポートの彼方へ 新たな天地学を求めて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ウェザーリポート展』カタログ、栃木県立美術館	6. 最初と最後の頁 8,23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 吉本弘 絵画の神髄	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 吉本弘カタログ・レゾネ	6. 最初と最後の頁 5,16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiro Yamamoto	4. 巻
2. 論文標題 Hiromu Yoshimoto - Essence of Painting	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hiromu Yoshimoto-catalogue resonancee	6. 最初と最後の頁 17,30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 19
2. 論文標題 平成と美術館（の危機）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術評論家連盟会報 19号 AICA Japan Newsletter	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 藤堂論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 藤堂カタログ	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《脂肪の椅子》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《死んだウサギに絵を説明するには》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《グランドピアノのための等質浸透》、	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《群れ》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《ケルティック+ ~~~~》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《私はアメリカが好き、アメリカは私が好き》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《汝の傷を見せよ》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《市電の停車場》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《作業場の蜂蜜ポンプ》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨゼフ・ボイス《苦境》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨセフ・ボイス《7000本の榎の木》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレス・ファイエル監督作品《ボイスは挑発する》パンフレット	6. 最初と最後の頁 ノンブルなし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 芸術による世界の承認をめぐる闘争について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『2Dプリンターズ』展カタログ、栃木県立美術館	6. 最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 渡辺晃一：光学的仮死状態とその融解について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 2	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiro Yamamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Kazushi Hirayama,	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 KOMOREBI-art brut japonais, le lieu unique scene national de nantes,	6. 最初と最後の頁 29-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 長沢秀之の新しい絵画についての一考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『未来の幽霊 長沢秀之展』カタログ (武蔵野美術大学美術館・図書館)	6. 最初と最後の頁 10-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 渡辺仁美論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 トーキョーアーツアンドスペースアニュアル2017	6. 最初と最後の頁 148-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 林菜穂論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 トーキョーアーツアンドスペースアニュアル2017	6. 最初と最後の頁 148-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本和弘	4. 巻 1
2. 論文標題 高木修の空間 その構造と価値について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 高木修展カタログ	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山本和弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 科学研究費報告書	5. 総ページ数 68
3. 書名 厚生芸術の実践的研究	

1. 著者名 山本和弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 栃木県立美術館	5. 総ページ数 98
3. 書名 『2Dプリンターズ』展カタログ	

1. 著者名 山本和弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 武蔵野美術大学美術館・図書館	5. 総ページ数 146
3. 書名 幽霊 長沢秀之展』カタログ	

1. 著者名 山本和弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 トーキョーアーツアンドスペース	5. 総ページ数 180
3. 書名 トーキョーアーツアンドスペースアニュアル2017	

〔産業財産権〕

〔その他〕

美術評論家連盟aica japan news letter  
<http://www.aicajapan.com/ja/category/newsletter/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----